

近代英語における未来を指す時間節での 直説法現在形の拡大

渡 辺 拓 人

要 旨

未来を指す時間節において、現代英語では直説法現在形の動詞が標準であるが、かつては仮定法現在形も使用されていた。本稿では、17世紀から18世紀の *before*, *till*, *until* で導かれる時間節を対象に、直説法の拡大の軌跡を実証的に明らかにし、動詞の語形選択に対する規範文法の影響の有無について考察する。データを見ると、直説法は17世紀末までに全用例の過半数を占めるまで拡大していたこと、動詞のタイプ頻度が仮定法では減った一方、直説法では増えたことが明らかになる。また、得られた結果を18世紀後半の文法書の記述と比較すると、規範文法が積極的な影響をもたらしたとは認められない。

キーワード：未来を指す時間節 (temporal clauses with future time reference)、近代英語 (Modern English)、直説法現在 (the present indicative)、仮定法現在 (the present subjunctive)、規範文法 (prescriptive grammar)

I 序 論

現代英語において、未来を指す時間節内で用いられる動詞は直説法現在形が標準である。これに関して、たとえば Swan (1995, p.583) は次のように述べている (太字は原文)。

Present tenses are often used instead of ***will + infinitive*** to refer to the future in subordinate clauses. This happens not only after conjunctions of time like *when*, *until*, *after*, *before*, *as soon as*, but in most other subordinate clauses—for instance after *if*, *whether*,

しかし初期近代英語（16-17世紀）では、直説法現在形に加え、仮定法現在形も用いられていた。Franz (1939, pp.528-29) の挙げるシェイクスピアの用例からいくつか下に引用し、例示する（下線は筆者）。

- (1) a. I pardon thee thy life before thou ask it. (*The Merchant of Venice*)
 b. Floreice is denied before he comes. (*All's Well That Ends Well*)
- (2) a. I'll be so bold as stay, sir, till she come down. (*The Merry Wives of Windsor*)
 b. I will resist such entertainment till | Mine enemy has more power.
 (*The Tempest*)

(1) と (2) はそれぞれ before と till で導かれる時間節であるが、a 文では仮定法現在形、b 文では直説法現在形の動詞が用いられている。

本稿では、未来を指す時間節における動詞語形の変化を実証的に追ひ、直説法の拡大の詳細や18世紀を中心に興隆した規範文法の影響の有無について考察する。

II 先行研究

時間節における動詞語形の変化は、これまでも数々の研究者によって言及されている。まず代表的な文献を概観した後、近年の研究での扱いに目を向けたい。

Poutsma (1926, p.183) は “the inflectional subjunctive is fairly common in literary English, especially after the literary *ere* and, in a less degree, after *before*, *until* (or *till*), instances after the familiar *when* being exceedingly rare” と述べ、用いられる接続詞によって仮定法現在の使用度が異なると指摘している。加えて廃用語法として、shall/should を用いた迂言的仮定法 (the periphrastic subjunctive) の存在にも言及している。Curme (1931, pp.406-7) も同様に、本来仮定法が使用されていた環境で、それに相当する shall が時折用いられるようになったことを指摘している。

Visser (1972, pp.871ff.) は中英語（12-15世紀）以前の用法にも言及しつ

つ変化をまとめている。before や till/until の後では、中英語から近代英語の初期に至るまで仮定法現在形が頻繁であったが、when の後では、近代英語に入ると仮定法現在形が急速に衰退したとしている。

このような立場は最近の研究でも踏襲されているが¹⁾ (e.g. Rissanen 1999, p.311; Denison 1998, p.304)、コーパスを用いた手法により、動詞語形の変化や接続詞による違いがより詳細に明らかにされている。Auer (2009, p.71ff.) は17世紀後半から20世紀までのデータを元に、仮定法現在形の使用はほぼ条件節に限られること、直説法の使用が最も多いのは時間節 (before, till, until) であることを示している。対象を19世紀に限った Grund and Walker (2006, p.99) も、仮定法が使用されるのはほとんどがifの後ろであり、時間節 (till, until) は2例のみであるという結果を提示している。また、時間節で未来の助動詞が用いられる迂言的構造について、小野 (1984, 323頁) は1760年を境にその使用が急低下していることを示し、その背景に規範文法の影響がある可能性を示唆している。

Ⅲ 手 法

本稿で分析するデータは、*The Oxford English Dictionary on CD-ROM* (以下 OED) の1601年から1800年までの200年間の引用文から収集されたものである。対象とする接続詞は before, till, until の3つである。when は直説法の使用がすでに確立しているため対象に含めない。動詞は、直説法と仮定法の形式的違いが確実に判断できる3人称単数現在形のもの (is/be を含む)、および助動詞とする。

Ⅳ 結 果

前節の手法により得られた結果を、接続詞ごとに、第1表から第3表にまとめる¹⁾。概観すると、3つの接続詞すべてにおいて、17世紀末までに直説

1) 各表における略号は次の通りである：仮－仮定法現在形、直－直説法現在形、助－助動詞。shall と will は、助動詞のうちそれらの出現数を示す。

第1表 before 節における動詞の形式

	1610 └	1620 └	1630 └	1640 └	1650 └	1660 └	1670 └	1680 └	1690 └	1700 └
仮	37	11	15	9	15	14	13	11	7	7
直	11	9	7	6	7	14	9	15	7	14
助	3	4	3	1	5	8	5	2	2	4
shall	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
will	0	0	0	0	1	4	1	1	0	0
合計	51	24	25	16	27	36	27	28	16	25
直(%)	21.6	37.5	28.0	37.5	25.9	38.9	33.3	53.6	43.8	56.0
	1710 └	1720 └	1730 └	1740 └	1750 └	1760 └	1770 └	1780 └	1790 └	1800 └
仮	2	2	2	2	0	1	1	3	1	0
直	22	18	26	17	16	17	14	15	9	12
助	5	4	1	1	0	6	6	3	3	5
shall	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
will	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
合計	29	24	29	20	16	24	21	21	13	17
直(%)	75.9	75.0	89.7	85.0	100	70.8	66.7	71.4	69.2	70.6

第2表 till 節における動詞の形式

	1610 └	1620 └	1630 └	1640 └	1650 └	1660 └	1670 └	1680 └	1690 └	1700 └
仮	59	26	30	43	48	26	33	40	32	14
直	15	12	7	7	14	12	14	17	28	32
助	4	1	2	5	4	1	5	3	1	1
shall	1	0	1	2	3	1	2	1	1	0
will	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0
合計	78	41	39	55	66	39	52	60	61	47
直(%)	21.6	37.5	28.0	37.5	25.9	38.9	33.3	53.6	43.8	56.0
	1710 └	1720 └	1730 └	1740 └	1750 └	1760 └	1770 └	1780 └	1790 └	1800 └
仮	13	6	6	9	5	5	11	4	4	8
直	23	24	27	20	30	42	34	18	36	36
助	2	2	0	0	2	3	2	4	3	4
shall	0	2	0	0	2	1	0	1	0	1
will	1	0	0	0	0	1	0	2	1	0
合計	38	32	33	29	37	50	47	26	43	48
直(%)	60.5	75.0	81.8	69.0	81.1	84.0	72.3	69.2	83.7	75.0

第3表 until 節における動詞の形式

	1610	1620	1630	1640	1650	1660	1670	1680	1690	1700
仮	42	12	9	4	12	12	13	7	2	4
直	4	0	1	2	7	8	4	8	6	1
助	1	2	1	2	2	1	1	2	1	0
shall	0	1	1	0	2	0	1	1	1	0
will	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
合計	47	14	11	8	22	20	18	17	9	5
直(%)	8.5	0.0	9.1	25.0	36.4	35.0	22.2	47.1	66.7	20.0
	1710	1720	1730	1740	1750	1760	1770	1780	1790	1800
仮	0	0	1	0	2	3	2	2	0	1
直	4	3	3	1	0	1	7	3	2	5
助	0	0	0	0	0	0	4	1	2	1
shall	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0
will	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
合計	4	3	4	1	2	4	13	6	4	7
直(%)	100.0	100.0	75.0	100.0	0.0	25.0	53.8	50.0	50.0	71.4

法の使用が5割を超え、その後18世紀を通じて増加していることが分かる。これは、before と till では18世紀前半に直説法が半数を超えたとする Auer (2009, pp.72-73) の結果と軌を一にするものであるが、Auer の示す数値は1650年以降50年ごとに区切られており、また用例数が限られている。第1表から第3表に示す OED からの結果はそれを補完し、実際に直説法が優勢になったのは17世紀最後の四半世紀であることを示している。また、助動詞の使用は限定的であり、小野 (1984, 323頁) の述べる18世紀後半の使用頻度の急落は認められない²⁾。

2) 小野 (1984, 323頁) の示す結果では、用例数が全体の半数近くを占める when 節での減少が顕著であるので、本稿の示す結果との違いはそこに起因する可能性がある。

V 考 察

1 直説法拡大の軌跡

未来を指す時間節において直説法が拡大した背景には、近代英語を通じた仮定法の衰退があることは明白であろう（e.g. Harsh 1968; Beal 2004, pp. 85-86）。加えて、after や when のように直説法の使用が優勢であった接続詞（Visser 1972, pp. 868ff.）からの類推が働いた可能性も考えられるだろう。しかしながらこれらの点は、本稿で扱うデータからは検証することが難しい性格のものであるため、本節では、時間節の中で用いられる動詞の種類という観点から考察したい。

第4表は、3種類の接続詞節で用いられる動詞のタイプ・トークン頻度を、仮定法と直説法の場合に分けて集計したものである。タイプ頻度に着目すると、仮定法では減少する一方、直説法では増加が認められる（ただし until は除く）。つまり、仮定法の使用は18世紀になると一部の動詞に限られるようになった一方、直説法では17世紀から様々な種類の動詞が用いられており、その範囲は18世紀に入りさらに広がったと解釈できる。

第4表 各接続詞節における動詞のタイプ・トークン頻度

		before		till		until	
		17c	18c	17c	18c	17c	18c
仮	type	53	4	118	27	38	2
	token	139	14	351	71	120	11
直	type	40	55	65	90	21	16
	token	99	168	168	287	38	29

第5表は、それぞれの接続詞節において最も使用数の多い3つの動詞をまとめたものである³⁾。仮定法では、時代を通じて be の使用数が圧倒的に多く、18世紀には事実上ほぼ唯一の動詞である。これは、15世紀以降、仮定法が主

3) 括弧内の数字はそれぞれの動詞の出現数を示す。出現数が1の動詞は載せていない。

第5表 各接続詞節における高頻度3動詞

Before		till		Until		
	17c	18c	17c	18c	17c	18c
仮	be (69)	be (11)	be (145)	be (41)	be (57)	be (10)
	come (10)	—	come (28)	have (4)	come (10)	—
	begin (5)	—	have (24)	arrive (2)	have (5)	—
直	is (30)	is (70)	has (46)	is (119)	has (9)	is (7)
	has (16)	has (15)	is (34)	has (30)	is (8)	becomes (5)
	comes (12)	comes (8)	comes (13)	comes (16)	comes (3)	has (4)

に be の機能であるとする Strang (1970, p.209) の見解と一致するものであろう。直説法については、第4表で多種多様な動詞が用いられていたことを見たが、第5表からは、どの時代でも一貫して has の使用数が上位であることが読み取れる⁴⁾。これは仮定法にはない、直説法の特徴とみなせるだろう。それぞれの接続詞節ごとに、17世紀前半の用例を下に例示する（下線は筆者）。

- (3) a. 1609 Skene *Reg. Maj., Stat. Rob. I* 23 The defender or his preloquoutour sould not answer; before the complainer or his preloquoutour hes spoken and said all.
 b. 1619 Dalton *Countr. Just.* cxiv, Bailment.. is the saving or delivery of a man out of prison, before that he hath satisfied the law.
- (4) a. 1602 Dekker *Honest Wh. D*, Set him beneath the salt and let him not touch a bit, till euery one has had his full cut.
 b. 1606 Shakes. *Ant. & Cl.* ii. vii. 114 Till that the conquering Wine hath steep't our sense, In soft and delicate Lethe.
- (5) a. 1601 Holland *Pliny* (1634) II. Fit one [vine stocke] to the other, ioynning pith to pith, and then binding them fast together so close, that no aire may enter between, yntill such time as the one hath adopted the other.

4) 直説法では is も多いが、仮定法でも be が多いため、これは直説法だけの特徴であるとは言えない。

b. 1626 Bacon *Sylva* § 423 A Tree, at the first Setting, should not be Shaken, yntill it hath taken Root fully.

実例を見ると、ここに引用したように大部分が完了助動詞の *has* であることが分かる⁵⁾。

以上をまとめると、次のような仕方で直説法単純現在形が広まったと言える。仮定法で用いられる動詞のタイプは減少の一途をたどったが、*be* は最後までそれに抵抗した。直説法で用いられる動詞のタイプは、時代が進むにつれて増加を続けた。その中でも完了助動詞の *has* が頻繁に使用される動詞であった。

2 規範文法との関係

仮定法が規範文法の中で度々言及された項目であることはよく知られている。Tieken-Boon van Ostade (2009, pp.84-85) は、16世紀末から一定して減少傾向にあった仮定法が18世紀後半から19世紀にかけてわずかに増加したことを、18世紀後半は上流の社会階級へ入ろうとする人たち (*social climber*) の存在、19世紀は規範文法の興隆と関連付けることができるとしている。とはいえ、仮定法の用いられる可能性がある種々の環境がすべて一様に取り上げられた訳ではない。規範文法で決まって引き合いに出されたのは *if* 節である。実際の使用でも、条件節における仮定法の使用と増加が際立っており、時間節ではわずかである (Auer 2009, pp.75-76)。

しかしながら、本稿の扱う時間節も規範文法の枠組みで取り上げられることがあったようである (Sundby, Bjorge and Haugland 1991, pp.268, 270)。18世紀後半に出版された文法書をいくつか紐解くと、仮定法を使うべきとする立場もあれば、直説法を使うべきとする立場もある (詳細な引用は付録を参照)。前者には、White (1746)、Elphinston (1765)、Beattie (1788)、Fogg (1792/1796)、Postlethwaite (1795) が挙げられる。これらの中でも態度は

5) 小野 (1984, 323頁) は、*before*, *till*, *until* の節では完了形が多く用いられると指摘している。

様々で、たとえば Beattie (1788) は古くからの仮定法を適切な用法としながらも、同時に、直説法の使用が話し言葉でも書き言葉でも当時の慣用であることを認めている。後者には、Priestley (1772)、Knowles (1796)、Murray (1798) が含められる。Priestley (1772) は、仮定法の使用が、堅苦しく耳障りな印象を与えることもあるとさえ述べている。

本節で見た18世紀後半の文法書の記述と、第1表から第3表に示した結果を比較すると、未来を指す時間節における動詞の語形について、規範文法の積極的な影響は認めがたい。影響があったとしても極めて限定的であったと思われる。if 節に比べて取り上げられる機会が少なかったことに加え、規範文法家の間でも見解が分かれており、当時の言語使用に影響をもたらすほどの力があったとは考えにくい⁶⁾。実際、17世紀末までに用例の過半数を占めるようになった直説法は、18世紀を通じて優勢であり続けた。

VI 結 論

本稿では、before, till, until で導かれる未来を指す時間節における動詞の形式について、1601年から1800年までの OED の引用文から用例を収集し、その変化の軌跡をたどった。その結果、17世紀間末までに直説法単純現在形の使用が全用例の過半数に達していたこと、また助動詞の使用は調査期間を通じて周延的であったことが判明した。直説法の使用数が拡大した際の詳細について、直説法では動詞のタイプ数が増える一方、仮定法では減少したことが明らかになった。頻繁に用いられた動詞は、直説法では完了助動詞の has、仮定法では be である。動詞語形の選択に対する規範文法の影響はなかったか、あったとしても限られたものであったと考えられる。

(筆者は関西学院大学商学部助教)

付記：本稿は Watanabe (2016) に基づく。本研究は JSPS 科研費 16K16858 および 19K13230

6) なお、調べた範囲では、助動詞の使用に言及した文法書は見つからず、小野 (1984、323頁) の見解を裏付けることはできない。

の助成を一部受けている。

付録

- White (1746, p. 10) (Auer 2009, pp. 38-39)
This Mood is called by us the *Subjunctive*, because there are certain words, in our language, to which it is generally *subjoined*, or which it generally follows.
These words are, *before, ere, except, however, if, lest, so, tho', till or until,*
- Elphinston (1765, p. 175) (Visser 1972, p. 868)
... *before, ere, till or until*, and *against*, which in their conducting nature require the subjunctive mood: as
Consider well *before* (or *ere*) thou *re*[***]*e*; and resolve not long *until* thou *execute*.
Exod. vii. 15. *Thou shalt stand by the rivers brink*, against *he* come.
- Priestley (1772, p. 120) (Sundby, Borge and Haugland 1991, p. 268)
Grammatical as this conjunctive form of verbs is said to be, by all who write upon the subject, it must, I think, be acknowledged, that it sometimes gives the appearance of stiffness, and harshness to a sentence. *That no pretensions to so illustrious a character, should by any means be received before that operation were performed.* Swift's Tale of a Tub, p. 55.
- Beattie (1788, pp. 256-57) (Sundby, Borge and Haugland 1991, p. 268)
And, both in speech and in writing, it has been too customary, of late years, to discontinue the use of that conjunctive or subjunctive mood, which was formerly, by our best writers, introduced after such words as *if, though, before, whether, unless, &c.*: as, "If he *write*, I will answer him,"—"Though he *slay* me, I will trust in him,"—"I expect to see him before he *go* away," &c. instead of which phrases, many people would now say, less properly, "if he *writes*—though he *slays*—before he *goes*," &c.* [*This, and the preceding, and some other grammatical and verbal improprieties, are frequent in Sterne.] This however is the more excuseable, because the indicative may sometimes be elegantly used in such a connection: as, "If there *is* a Power above us, he must delight in virtue." For the first clause, though introduced by *if*, is not meant to express what is in any degree doubtful, indefinite, or dependent: and therefore, it has not that character, which distinguishes the subjunctive from the indicative. —As our language has too little inflection, it is pity it should lose any of the little it has.
- Fogg (1792/1796)⁷⁾ (Sundby, Borge and Haugland 1991, p. 270)
(1520) Till thou hast brought the whole. (1792, p. 165)
[1520] thou have brought (1796, p. 79)
- Postlethwaite (1795, pp. 215-16) (Sundby, Borge and Haugland 1991, p. 270)
See that thou *rememberest*, that the Subjunctive Mood implies something either dependent,

7) 第1巻(1792)の練習問題に対する解答が第2巻(1796)で示される形式である。

indefinite, or doubtful; and it often depends upon such Words as *unless, before, till, though, and if*. Also *take* Heed lest thou *forgettest*, that *before, or till*, often implies Futurity, and generally requires the Subjunctive. ...

Though he *slays* me—Before he *goes*—If I tarry till he *comes*—all such Expressions, and doubtful Affirmations, are necessarily Subjunctive; and should therefore drop the *s*, which is the Personal Termination.

- Knowles (1796) (Sundby, Bjorge and Haugland 1991, p. 268)

The Present Tense is used, ... After the Words, *when, after, still* [sic.], *before, as soon as, &c.* having a Relation to some future Action or Event; as, when he *arrives* I will tell him, as soon as she *comes* you may go. (p. 22)

Before she *comes* (p. 115)

- Murray (1798, p. 58)

The present tense, preceded by the words, *when, before, after, as soon as, &c.* is sometimes used to point out the relative time of a future action

引用文献

- Auer, A. (2009), *The Subjunctive in the Age of Prescriptivism: English and German Developments During the Eighteenth Century*, Palgrave Macmillan.
- Beal, J. C. (2004), *English in Modern Times*, Arnold.
- Beattie, J. (1788), *The Theory of Language*.
<https://books.google.co.jp/books?id=PrBDAAAacAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
- Curme, G. O. (1931), *A Grammar of the English Language, Volume II: Syntax*, D. C. Heath.
 [Reprinted by Verbatim, 1979.]
- Denison, D. (1998), “Syntax,” in Romaine, S. ed., *Cambridge History of the English Language, Volume IV: 1777–1997*, Cambridge University Press.
- Elphinston, J. (1765), *The Principles of the English Language*.
<https://books.google.co.jp/books?id=7V5gAAAacAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
- Fogg, P. W. (1792/1796), *Elementa Anglicana*.
<http://nrs.harvard.edu/urn-3:GSE.LIBR:3425955> [最終アクセス日：2019/11/04]
- Franz, W. (1939), *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*, Max Niemeyer Verlag.
 [Reprinted by Max Niemeyer Verlag, 1986.]
- Grund, P. and T. Walker (2006), “The Subjunctive in Adverbial Clauses in Nineteenth-Century English,” in Kytö, M., M. Rýden and E. Smitterberg eds., *Nineteenth-Century English: Stability and Change*, Cambridge University Press.
- Harsh, W. (1968), *The Subjunctive in English*, University of Alabama Press.
- Knowles, J. (1796), *The Principles of English Grammar*, 4th ed.
<https://books.google.co.jp/books?id=bl5iAAAacAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
- Murray, L. (1798), *English Grammar*, 4th ed.

- <https://books.google.co.jp/books?id=yFliAAAAcAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
 Postlethwaite, R. (1795), *The Grammatical Art Improved*.
- <https://books.google.co.jp/books?id=ZV5iAAAAcAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
 Poutsma, H. (1926), *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Section II, P. Noordhoff.
- Priestley, J. (1772), *The Rudiments of English Grammar*, 3rd ed.
- <https://books.google.co.jp/books?id=mwUAAAAQAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
 Rissanen, M. (1999), “Syntax,” in Lass, R. ed., *The Cambridge History of the English Language, Volume III: 1476-1776*, Cambridge University Press.
- Strang, B. M. H. (1970), *A History of English*, Methuen & Co.
- Sundby, B., A. K. Bjorge and K. E. Haugland (1991), *A Dictionary of English Normative Grammar 1700-1800*, John Benjamins.
- Swan, M. (1995), *Practical English Usage*, 2nd ed., Oxford University Press.
- The Oxford English Dictionary on CD-ROM*, ver. 1.14, Oxford University Press.
- Tieken-Boon van Ostade, I. (2009), *An Introduction to Late Modern English*, Edinburgh University Press.
- Visser, F. T. (1972), *An Historical Syntax of the English Language*, Part II, E. J. Brill.
- Watanabe, T. (2016), “The Development of the Simple Present Tense in Adverbial Time Clauses in Modern English,” paper presented at Kyoto Postgraduate Conference on English Historical Linguistics 2016, Kyoto University.
- White, J. (1746), *The English Verb*.
- <https://books.google.co.jp/books?id=Yl5gAAAAcAAJ> [最終アクセス日：2019/11/04]
 小野捷 (1984) 『英語時間副詞節の文法』 英宝社.